

博士論文概要書

「永遠の哲学」へ向けて

——ハイゼンベルク量子力学的世界像によるヤスパース形而上学の基礎づけと限界——

大沢 啓徳

I. 序

本論は、ヤスパース形而上学における諸概念を検討し、形而上学としてのヤスパース実存哲学の可能性を再確認することを目的とする。しかしながら、形而上学に関するヤスパースの記述は全体的に不明瞭であり、また、もはや形而上学に価値を見出すことができない我々現代人の感覚に適合しないところが多々ある。ヤスパースの言説をどれほど緻密に分析したとしても、或いは、ヤスパースと関連のある思想家を哲学史のうちに探し出し、彼らと比較対照したとしても、その不明瞭さを克服することは望めず、我々を説得するには到らないであろう。そこで本論は、量子力学という科学的な見地、またそれにもとづいて展開されたハイゼンベルクの量子力学的世界像を手がかりにしてヤスパースを解釈するという方法を採用した。

二十世紀初頭に誕生した量子力学は、現代の科学技術の発展に決定的な役割を果たしたものであるが、それは単に科学の世界だけでなく、思想の世界に対しても、大きな影響をもたらしたものである。量子力学以前に支配的であったニュートン物理学が、実験を行う観察者に特権的な立場を与え、主観に対峙する客観を取り扱ってきたのに対し、量子力学は、主観と客観の間には絶えず相互作用が働いていること、すなわち、客観化・対象化されたものは、もはやその出来事のありのままの姿を示しているのではなく、主観による影響を受けたものであることを明らかにし、真実は、主観＝客観関係を越えた領域にあるということを意識化させたのであった。このことから、量子力学の創始者であるボーアは、遙か以前からその領域を問いつけてきた東洋的な思惟様式に親近性を認め、また、宗教者の側においては、その領域に神の働きを見出すような試みがなされてきた。そして、存在者の全体ではなく、存在そのものの、或いは超越を問う哲学もまた、この領域とは無縁ではないのである——ハイデッガーとハイゼンベルクの間には、思想的な交流がなされていた。

しかしながら、量子力学の原理だけでは、ヤスパース形而上学を基礎づけることはできない。そこで本論は、その生涯を通じて、量子力学の原理に裏打ちされた世界観を語ってきたハイゼンベルクの言説を導入した。その言説——量子力学的世界像——は、なるほど厳密な意味での科学ではないが、科学の意味を知る人間の言説であり、それが、ヤスパースの思惟の多くを解明するのに寄与するのである。しかしそれでも解明しえないところ、すなわち基礎づけの限界が残る。それが、最終的に本論が明るみにもたらしたいと願う、形而上学としてのヤスパース哲学の核心であり、そこへ向かう一連の運動が、「〈永遠の哲学〉へ向けて」という、本論の主題である。

II. 予備的考察

ここでは具体的な考察に先立って、本論の試みがただちに惹起するであろう批判に対する弁明を行う。まず、根源を異にする学問である科学と哲学を対照させることに対する批判を吟味する(II-1)。ヤスパースは、科学は対象化を行うことによって、非対象的なものを狙う哲学とは異なるという見解を貫くが、それでも、量子力学の営みが「硬直した思考の枠組み」を「突破」するものであると評価していた。また、科学と哲学は質的に異なるというヤスパースの主張が、往々にして、ヤスパース哲学の不明瞭さを容認する一つの口実として用いられてきたのではないかという我々自身の問題を指摘する。次いで、厳密な数式の上に成立している量子力学の理論の帰結が、曖昧さを免れ得ない日常言語によって語られることの危険性に対する批判を吟味する(II-2)。その批判は謙虚に受け止められねばならないが、しかし、科学がかつての宗教の役割を担っているよ

うな今日、科学的な知に授かることは、避けられないことであるという問題を考察する。ここでは、ボーアもハイゼンベルクも、科学的な知と哲学とを関連づける企てを後押ししてくれている。最後に、人格と事柄の問題に言及する(II-3)。本論では、ハイゼンベルク、ヤスパースに関する伝記的な事柄にはほとんど興味を持たない。むしろ人格は、第三者の証言や、彼らが置かれた不可避的な状況で発せられた断片的な言葉に探し求められるのではなく、ただ彼らが自覚的に表現した事柄＝思想のうちに必然的に滲み出るものではないかという本論の立場を説明する。

III. 量子力学の根本原理

ここでは、量子力学の根本原理について、探求の歴史的な経緯を考慮しつつ、一般的な叙述を行う。まず、原子の内部構造を説明することから始まった、ニュートン力学から量子力学への展開を確認する(III-1)。次いで、その展開に到る一つの契機として、不確定性原理を考察する(III-2)。それは、素粒子に対しては、観測者の側による観測対象への「干渉」は不可避免的であり、対象の位置と運動量を同時に把握することができないということ、従って、そこでは、方程式を立てられず、因果律は適用されないということを明らかにする。また、もう一つの契機として、相補性の概念を考察する(III-3)。それは、相反する主張が、実は同一の事象を説明するという出来事を説明する。例えば、光は、粒子として捉えられると同時に、波としても捉えられるが、粒子であると同時に波として捉えられることはない。或る観測手段を用いれば、それは粒子として、また別の観測手段を用いれば、波として現象する。おのおのが、本来的には観測による干渉を受けてはならない同一の事象を、相補う仕方で説明するのである。結局、不確定性原理も、相補性の概念も、観測行為の意味を問うことになる(III-4)。純粋な観測はあり得ず、我々は常に、我々自身の関与によって制限された対象を眺めているに過ぎない。更に、それは観測者という主体の絶対性を剥奪することによって、何か革命的な意図の下に提示されているという批判もあるが、しかし、このような帰結は、我々が恣意的に構築したものではなく、自然によって要請されたものであるということを確認する(III-5)。

IV. ハイゼンベルクにおける量子力学の世界像

ここでは量子力学の原理から展開された、ハイゼンベルクの世界観——量子力学的世界像——について考察する。なるほどそれは純粋な科学的な知ではなく、ハイゼンベルクその人を媒体とした一つの世界観であるが、他の物理学者達の思想が、ともすれば個人的な世界観を吐露するという印象が否めないのに対し、ハイゼンベルクの場合には、哲学的な思索と関連づけられて、普遍的な知へと高めようとする意図が明確である。またそうであればこそ、ヤスパースと対照させることが意味を持ちうるのである。

まず、「誤った哲学がもたらした先入観」としてハイゼンベルクが批判するものを考察する(IV-1)。それは、デモクリトスに由来する、それ以上は分割できない最終的な素粒子という概念であり、デカルトの二元論である。ハイゼンベルクは、相補性の原理が光が粒子であり波であることを例に説明したように、素粒子が、別の観点から考察すれば、個性性が喪失された、唯一のエネルギーとして観察されるところから、最終的な素粒子という概念の不可能性を論じる。また、デカルトの二元論によって、客観とそれに対峙する主観との間に明確な境界線が引かれ、それがニュートン力学並びに近代自然科学の発展を基礎づけたが、しかし、そのような主観と客観との分割は、観測における主観と客観の「相互作用」、或いは、観測者という主観の側による客観への

不可避的な干渉という先述の問題を考えれば、もはや不可能なのである(IV-2)。そして、量子力学が明るみにもたらした、そのような根源的事態を無視することを「独断論的リアリズム」、それに対し、その事態を了解した上で、主観と客観との関係を保持する態度を「実践的リアリズム」とハイゼンベルクは定義する(IV-3)。その定義を確認した上で、「独断論的リアリズム」の批判として、人間の精神の内奥に対しても因果律を置こうとする態度、或いは、すべての意識現象を脳に還元する態度を分析する(IV-4)。そしてまた、物質を分割していく努力は、或る限界を超えると、その生命を殺めてしまうというところに、生命の尊厳であり、人間の自由の起源を見出す(IV-5)。或いはまた、この世界におけるすべての物質が、最終的にはその素粒子において唯一のエネルギーへと転換する、すなわち主観＝客観を越えた一なる境涯が開かれてくるというところに、ハイゼンベルクが、本当の意味で人類を統一する場を意図していたことを示す(IV-6)。更に、そのような一なる場、ハイゼンベルクが「中心領域」と表現する場と関わるのが、人間に歓喜を与え、生への力を呼び起こすとするハイゼンベルクの芸術観を考察する(IV-7)。また、ハイゼンベルクのゲーテ解釈について検討する(IV-8)。ハイゼンベルクは、ゲーテの原現象の理念を、量子力学的な観点から論ずるが、このゲーテ解釈が、ヤスパースとハイゼンベルクとを区別する境界として、後の考察に意味を持つてくる。すなわちハイゼンベルクは、この世界における諸存在者を、エネルギーである「中心領域」から形相としての素粒子を纏って現象したものとして構造化する。そしてこの美しい構造を産み出したものとして、神を賛美するのである。そこでハイゼンベルクの神の概念、ハイゼンベルクにおける存在経験について考察し(IV-9)、また彼が信仰を人間的な実践と結びつけるが故に、最後に、ハイゼンベルクが意図する実践の意味についても考察を加える(IV-10)。

V. 量子力学的世界像によるヤスパース形而上学の基礎づけ

ここに到る考察をもって、ヤスパース形而上学における諸概念の妥当性を確認する準備が整ったと言える。まず、量子力学は、ニュートン力学の妥当しない領域を切り開いた。すなわち我々の日常態としてのこの世界を越えて、もはや主観－客観関係の枠組みでは把握されない領域のあることを示した。そしてこのことは、「我々は何を知り得ないのか」と自問した若きヤスパースにおいて既に無意識的に先取りされ、彼の哲学的思惟の根幹を担う、「主観－客観－分裂」の概念的に説明づけるものである(V-1)。そしてヤスパース哲学は、この分裂を越えるものである存在＝超越へ憧憬を抱くものであるが、しかしながら、分裂を越えるものは、決して抽象的な彼岸的世界ではない。ヤスパースは「異なる次元において平行関係にある一つの世界」という仕方で、分裂の内と外、内在と超越、或いは存在者と存在という構図を表現するが、まさに、ある一つの対象が、ニュートン力学に内在的にも、量子力学に超越的にも考察されるという事態が、この平行関係という表現を裏づける(V-2)。そしてヤスパースが、世界が「透明」となったところに存在が顕現すると見なしていることは、内在的な見方が括弧に入れられたとき、素粒子であると同時に唯一のエネルギーに満ちた領域が立ち現れるという意味であると解釈される(V-3)。またヤスパースは、存在＝超越を「生そのもの」と比喩的に語るが、量子力学的に言えばそれは、まさに唯一のエネルギーである生そのものから派生することによって、内在における一つの生、個別的存在者が誕生することである。それがヤスパースが「原初の創造」という表現で呼ぶ、個別的存在者の誕生のプロセスであり(V-4)、我々は、「形而上学的想起」によって、一度体験したその誕生の場を自ら経験することができるとされる(V-5)。更にまた、ボーア、ハイゼンベルクが、主観－

客観関係の妥当する日常的な世界と、量子力学が扱うそれを越えた世界とを識別するものは、流れる時間の速度の差異であるとみなすところから、ヤスパースの「瞬間」概念を考察する。ヤスパースは瞬間に対する集中、充実した現在への決断と、瞬間に切り込んでいく在り方を強調するが、まさに瞬間こそが、内在を生きる我々人間にとって、日常的な時間性を脱して、存在＝超越へと接近する唯一の通路なのである(V-6)。そして、現実と可能性というヤスパースの表現を分析し、ヤスパースが存在＝超越の側での出来事を現実、この世界の内側での出来事を可能性とみなしていることを確認し(V-7)、そこから現実的実存と可能的実存という術語の意味を確認する(V-8)。そのような現実的実存に対し、量子力学が認めた生命への尊厳や自由であるところのものを重ね合わせることによって、ヤスパースが「人間は汲み尽くせない」と表現する実存の自由を摘出し、更に、ヤスパースの思惟において自由と必然とが表裏一体に語られる根拠を検討する(V-9)。そして、そのような自由であることが、同時に超越から贈与されたことであるというヤスパースの言明が、ハイゼンベルクが唯一のエネルギーからの派生する構造を神の創造に喩えた出来事と同じ図式にあることを、また、ヤスパースが人間の「不死性」として語るところのものが、個別的な生がそこから生まれ、その存在の解体とともにそこに帰還する生そのものであるということ摘出する(V-10)。更に、ハイゼンベルクが唯一のエネルギーを人類を統一する場と見なしていたように、存在＝超越＝生そのものの次元においては、実存は、すべての実存と「絶対的な連帯性」のうちにあり、それが損なわれることに対し我々が責任を負うことが、ヤスパースにおける「形而上学的な罪」の概念の由来であることを確かめる(V-11)。そして、上記の考察を踏まえて、ヤスパースの「実存的交わり」、それに付随する「愛の闘争」の概念を検討する。ヤスパースは、「他者の存在のうちに、存在そのものを看る」という表現をするが、如何にしてそのような表現が可能であるかを分析する(V-12)。それを更に深めて、ヤスパースの実存概念を再検討する。問題は、ヤスパースが、実存に「個体的存在者」という意味での個別性を認めず、しかしながら、彼の記述には、実存が個別性の影を担っているというところに存する。ここでは、ヤスパースの東洋的思惟様式に対する憧憬や、一性と複数性をめぐるヤスパースの記述の難点を指摘したマルセルの批判などを手がかりに、個別性の影が避けられない事態について考察する。結論としては、平行にある二つの次元を保持し、そしてその狭間で運動する人間の姿をありのままに描き出そうとするヤスパースの態度が、この問題の根底にあるということを論ずる(V-13)。更に、ヤスパース形而上学の極みである「暗号文字の解読」に検討を加える。まず「内在的超越」という独特の表現で特徴づけられる暗号の概念を、相補性の概念を手がかりに考察する。すなわちこの世界にあるものは、対象性という観点からみれば内在であるが、対象性が消失した、主観－客観関係に依存しないものとみれば、同時に超越を指示する。そして、「内在的超越」としての「暗号」が弁証法的運動にあると呼ばれることも、内在と超越という二つの次元が、絶えず平行関係にあり、どちらか一方に固定化され得ないというところから導き出す(V-14)。そして、ヤスパースが語る存在経験、形而上学的経験を、ハイゼンベルクが自らの体験として語った一つの宗教的体験との対比において分析しつつ(V-15)、しかし、ヤスパースにおいては、超越は「三つの言語」を通して語られるところから、ヤスパースにおける存在経験の幅について考察を進める(V-16)。第一言語は直接経験であり、第二言語は、自然や芸術を媒介とした直観的な存在経験である。ここで、量子力学の端緒を得たボーアの直観は、実は第二言語の解読ではないのかという指摘を行う。思弁的解読とも呼ばれる第三言語は、伝承された形而上学的な記述を手がかりに、存在へと接近する企てである。そしてヤスパースの関心が、この第三言語の解読、すなわち我々の思惟に

もとづく接近であり、それがより定式されたものが「つつむもの」という思想であることを示す(V-17)。それは、ハイゼンベルクが「実践的リアリズム」と呼んだものにふさわしく、逆に、「独断論的リアリズム」の例として、ヤスパースが行った「精神分析批判」の内実を検討する(V-18)。そして、ヤスパースが評価する精神科医達が、理性的に「実践的リアリズム」を遂行する人々であること、或いは、ハイゼンベルクが、「中心領域」に関わることを人間の実践の基準としたことから、ヤスパースの理性概念の内実について考察を進める(V-19)。主観－客観－分裂を越えた、存在＝超越に関わるヤスパースの思惟は、なるほど一般的には非理性的な営みであるかもしれない。しかし、ヤスパースにとっては、非理性的なものの上に、本当の意味での理性があるとされる。そのような理性でもって、我々は、ハイゼンベルクが「中心領域」と呼んだところのもの、ヤスパースで言い換えれば、「永遠の哲学」へと向かう。もちろん、その領域は決して客観化・対象化され得ないが、しかし絶えずその周りを巡って思索が繰り広げられているような場であり、またそこへ向かう営みを宗教的に表現するものが、「哲学的信仰」であることを示す(V-20)。

VI. 量子力学的世界像による基礎づけの限界

しかしながら、基礎づけの限界がある。それはゲーテ解釈を巡って露呈した、ハイゼンベルクとヤスパースにおける根本的な差異である(VI-1)。ハイゼンベルクはゲーテに人間の理想を見出し、ゲーテとともに生きることが、我々の生を正しく、清らかにするものと考えていた。しかしヤスパースは、ゲーテにおける調和的思考を鋭く批判する。ヤスパースによれば、ゲーテは、この世界の意味を説明することができない局面に追い込まれると、それを詩作によって美しく纏め上げ、それでうやむやに片付けてしまう傾向がある。そして、ハイゼンベルクが、世界を構造として表現するとき、そこにあるのは、その構造に従ってすべてが進行していくという、調和的な思考ではないだろうか。ゲーテに対してヤスパースが提示するのは、彼が「例外者」として述語化したキルケゴール、ニーチェである。彼らは、安易な調和を退け、挫折のうちに、人間の生の悲惨さを見届け、それでも生の意味を得よう努めた人間であった(VII-2)。彼らをヤスパースは、自らの哲学の進む道標とし、「内的行為」の遂行を通して、「永遠の哲学」へ向けて、存在＝超越へ開かれた空間を保持するよう促すのである(VI-3)。

VII. 結語

アドルノはミクロロジーという概念を提示する。それは、もはや唯一の絶対者を前提するのではなく、この世界における諸存在者から出発し、それらが織りなす多様な付置関係によって、絶対的なものを我々の意識のうちに呼び起こす企てである。ハイゼンベルクは、素粒子という具体的なものを手がかりに、唯一のエネルギーを表現し、ヤスパースは、諸々の形而上学的概念を駆使して、存在＝超越へと我々を促す。ヤスパースを理解するにあたり、量子力学並びにハイゼンベルクを導入した本論の企ても、この付置関係を豊かにする試みであったと言えるだろう。

(7889 文字)